

## 総括研究報告書

1. 研究開発課題名：高齢脳卒中患者をモデルとした栄養管理と摂食機能訓練に関するアルゴリズムの開発、および経口摂取状態の改善効果の検証

2. 研究開発代表者： 小川 彰（岩手医科大学 学長）

3. 研究開発の成果

本事業の最終目的は、脳卒中患者における適切な栄養・リハビリテーション管理のアルゴリズムを立案・検証することにより、脳卒中患者の急性期～回復期における経口摂取移行率を向上させることである。本研究事業では、はじめに急性期病院 34 施設および回復期リハビリテーション病院 25 施設から収集した後方視データの解析を行った後、脳卒中患者の経口摂取状態を向上させる栄養・リハビリテーション管理のアルゴリズム立案に資するデータを得ることを目的とした分担研究 1.~3. の計画を立案し、2014 年 1 月より実施した。

研究 1. 「脳卒中急性期患者を対象とした発症後早期からの摂食機能訓練介入効果の検討」では、一定以上の重症度の脳卒中患者に対して入院当日から摂食機能訓練を実施した場合でも肺炎発生頻度は増加せず、積極的かつ体系的に摂食機能訓練、嚥下機能スクリーニング検査、および栄養管理を実施することにより、急性期病院退院時の経口摂取状態の改善が期待できることを明らかにした。研究 2. 「回復期リハビリテーション病棟における脳卒中患者の栄養モニタリングの頻度の違いが栄養状態および身体機能の回復に与える影響の検討」では、回復期リハビリテーション病棟入院時に摂食嚥下障害を有し、かつ **Body Mass Index (BMI)** が 18.5 未満の低栄養状態にある脳卒中患者においては、高頻度に栄養モニタリングを実施することで、より効率的に **BMI** および経口摂取状態の改善が得られる可能性があることを明らかにした。研究 3. 「経管栄養を要する脳卒中患者を対象とした栄養投与経路および投与栄養剤の形状の違いによる影響の検討」では、回復期リハビリテーション病棟入院中に長期間経管栄養を要する脳卒中患者においては、胃瘻造設ならびに栄養剤の半固形成によって、経口摂取状態の改善およびカテーテル留置の苦痛軽減、栄養投与時間の短縮による苦痛の改善が得られる可能性があることを明らかにした。

上記研究の遂行と並行して、2014 年 8 月より研究 4. として「質的研究手法による脳卒中急性期・回復期における栄養管理と摂食機能訓練のアルゴリズムに関するコンセンサスガイドラインの作成」を行い、急性期・回復期のそれぞれの領域での **Nominal Group Discussion (NGD)** の実施と **Revise** を行い、「脳卒中急性期患者を対象とした栄養管理および摂食嚥下機能訓練のコンセンサスガイドライン」および「回復期リハビリテーション病棟における脳卒中患者を対象とした栄養管理および摂食嚥下機能訓練のコンセンサスガイドライン」を創案した。

両コンセンサスガイドラインについて、急性期および回復期の脳卒中患者に適用した際の栄養状態および経口摂取状態、コンセンサスガイドラインの適用率（バリエーションの有無）および施設研究責任者による総合評価を検討する研究計画を立案し、研究 5. 「急性期および回復期における脳卒中患者を対象とした栄養管理および摂食嚥下機能訓練に関するコンセンサスガイドラインの有用性の検討」として 2015 年 7 月より実施した。「脳卒中急性期患者を対象とした栄養管理および摂食嚥下機能訓練のコンセンサスガイドライン」については一定の実用性が期待されることが明らかとなったが、本研究は現在も継続中であり、適用された症例の臨床上の有用性および「回復期リハビリテーション病棟における脳卒中患者を対象とした栄養管理および摂食嚥下機能訓練のコンセンサスガイドライン」の実用性・臨床上の有用性の評価について、今後さらなる検討を要する。